

インフルエンザにより心筋梗塞の発症リスクが上昇

急性心筋梗塞は呼吸器感染症が誘因となって発症する可能性が指摘されている。これまでの研究により、インフルエンザと急性心筋梗塞の関連が示されているが、それらはインフルエンザの診断が不確かであったり、研究デザインにおいてバイアスが疑われたりするものであった。そこで本研究では、インフルエンザ感染の確定診断のもと、インフルエンザ感染と心筋梗塞との関連について検討した。

特異性の高い種々の検査法によりインフルエンザ感染を確認し、急性心筋梗塞による入院については行政データを参照した。検体採取後の7日間をリスク期間、リスク期間前後1年間を対照期間とした。インフルエンザ検査の結果が陽性で、検査の前後1年以内に急性心筋梗塞により入院した患者は364例あり、そのうち20例はリスク期間中の入院、344例は対照期間中の入院であった。対照期間と比較したリスク期間の発症率比は6.05であった。7日目以降は急性心筋梗塞の発症リスクの増加はみられなかった。リスク期間の心筋梗塞発症率比をウイルス別にみると、インフルエンザB型が10.11、インフルエンザA型が5.17、RSウイルスが3.51、そのほかの呼吸器感染症ウイルスが2.77であった。

今回の結果から、呼吸器感染症のなかでも特にインフルエンザは心筋梗塞発症のリスク上昇と関連することが示された。

出典：New England Journal of Medicine. 2018; 378(4): 345-353.